

# 東邦、市川、かえつ有明、文化学園大学杉並合格

子供は年長から小6の受験直前まで、現地校と海外のインター校に通っていました。本人は中学受験は希望していたものの、地方都市で塾もなく、受験の準備をしたいが手段が見つからない。受験がない現地の学校のお友達とのんびりとした環境の中で、自分は何をどれだけやればいいのかわからない、といった状況でした。

そもそも子供が中学受験を決めたきっかけは、学校特集が載った雑誌をみて、本人がこの学校に行きたい！と思ったことです。一時帰国時の小4当時、学校見学をしてその思いはさらに強まりました。中学受験を意識し始めてからは、日々の積み重ねが後々大事になってくる漢字、計算そして受験算数の基礎をコツコツ学習しました。また、海外では日本語の活字に接する機会が少ないことと、本人の希望もあって、每晚読み聞かせをしていました。

そうこうしているうちに小6になり、ご縁あってオンライン授業を提供してくれる ena と出会い、小6のプレ夏期講習から夏期講習、そして受験直前までどっぷりお世話になりました。

子供は個人のオンライン授業を受講したことはありましたが、集団授業の経験はゼロでしたので、授業のペースについていけるのか、そもそもオンラインでどれだけの効果が期待できるのか、と不安はありました。オンライン集団授業を始めてすぐの頃、レベルについていけないとあって授業から逃亡した時（部屋の扉の前に椅子を積み上げ、砦を作っていた。）には、「最初は誰でもできないからもう少し続けてみよう」と励ましたこともありました。また、集団授業に慣れていないためか、最初はオンラインのカメラに映ることがストレスで授業に集中できないと言うので、ご配慮いただき、慣れるまではカメラをオフにして参加していました。当初はこんな状態でしたが、プロフェッショナルの先生方に子供の知的好奇心とプライドをくすぐっていただき、気がづけば、ストイックに追い込む授業がむしろ心地よい？といった状況に変わっていきました。

帰国後、受験直前もコロナで通塾は叶わず全てオンラインを選択しましたが、子供の受験に対するモチベーションは下がることなく、最後まで走りきることができました。オンラインでの合格発表の時には、私自身が緊張してしまい、パスワードを何度も入力ミスしてしまいました。(汗)

受験後には、「ena と出会ったおかげで、これだけ濃密な（短期ではありますが）受験勉強ができたし、学力面でも精神面でも大きく成長できたよね！」と子供としみじみと振り返りました。ストイックな生活を続けたいという子供は、今でもあれこれ模索する日々を送っています。

また、海外ですとアクセスできる情報にも限界がありますが、先生方に不安や疑問をお伺いすることで、私自身の力にもなっていただきました。

最後に、お力添えいただいた先生方事務の方に改めて深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

# 茗溪学園合格

## 中学受験を決めたきっかけ

コロナ禍で日本に長期間待避しなければならなくなり、日本にいながら駐在地のインターのオンライン授業を受ける期間が長くなっていて小5の1月頃に、このままコロナの状況に振り回されて英語も日本語も中途半端な立場になるようなら、帰国子女を多く受け入れて確かな教育を受けられる日本の学校に預けた方がいいのではないかという判断がきっかけになりました。

合わせて駐在期間がいつ終わるかもわからないため、狭き門になる帰国生編入よりも中学受験で中1から入りたいという本人の希望もあり、決定しました。家族の駐在はまだ続き、(コロナでの日本待避がなければ) 現地のインターに不満があるわけではなかったため、ダメだったら他に無理して行く必要はないという判断をし、寮を持ち、教育内容や学校の雰囲気親子ともに惚れぬいた茗溪1校のみに照準を絞りました。東京にいるときは対面もでき、状況に応じてオンラインでも対応してくれ、帰国生受験の実績が多数ある ena を最終的に選びました。

### ・現地での学習で苦労したこと、うまくいったこと

小3の途中で日本から現地に行ったので、まずは英語の環境に浸かってもらうために日本の塾や特別な勉強はほとんどしませんでした。時間のある時に、現地で手に入った公文のテキストと、漢字検定と英語検定の取得準備と音読だけはコツコツと進めていました。検定類は勉強の区切りとモチベーションになるのでやりやすく、いざ受験勉強に舵を切った時にある程度の基礎力になっていたのも、やっていたよかったと思いました。

小5の1月に中学受験することを決め、現地に戻った後は学校に通いつつオンラインで ena の授業を受けました。山中先生のおかげで、新6年としての春期講習の頃に初めて国語が楽しいと思った、と楽しそうに言っていたのが印象深いです。それぞれの目標を持つクラスメートとの交流がとても楽しそうで、はげみになっていたようです。親との勉強で泣いたり怒ったりすることはあっても、ena や受験勉強自体を嫌がることは一回もありませんでした。

しかし、6年夏頃まで算数の数式もまっすぐ書けず、字の大きさもバラバラで汚く、筆算は小さい字で秩序なく書くので間違いやすく、あとからの見直しがやりにくく、結果検算もほぼやらない、という壊滅的な状態で、模試の志望校判定でも志望校再検討を求められる文言が並んだところから、私と夫が可能な限り手伝うようになりました。「きれいにまっすぐ書け。必ず検算をしろ。単元は、何も見ないで正答にたどり着けるようになってマスターしたと言い切れるまで何度も何度も繰り返しなさい」試験直前まで、これしか言ってなかったかもしれません。

親が直接関わるようになってから、宿題以外に、特訓算数の小5と小6の上下巻を何周も繰り返し、親子で穴を埋めていきつつ、過去問の傾向から必ず試験で出てくる算数の単元を分析して割り出し、特に気を付けて繰り返しました。グローバルクラス専願入試は一般推薦入試と同程度のものとのことだったので過去問にある推薦問題や、それより難しい一般入試の問題を繰り返しました。親子での繰り返しの中で私では説明しきれない問題は、くどいほど佐々木先生や永田先生に塾で質問していたようです。

#### ・学校選びのポイント

英語力をさらに向上させ、海外への大学進学も視野に入れたかったため、全体の30%が帰国生で、(グローバルクラスに選抜されれば)英語をネイティブスピーカーから学べて、IBコースと海外進学実績がある茗溪学園を選びました。幸運なことにスポーツが盛んなこと、学校の質実剛健な雰囲気の子供の性格や志向にぴったりだったのも大きかったです。

#### ・これから受験する生徒さんの保護者様へのアドバイス

私自身が親に勉強を見てもらったことがなかったため、今回も、環境だけ揃えたら本人に任せた方がいいのではないかという考えを受験勉強開始当初は持っていました。しかしこれはやはりタイプによります。親がペースメーカーあるいは家庭教師になってあげた方がいい場合と本人に任せた方がうまくいく場合と、見極めが大事だと思います。私は6年生夏ぐらいから踏み込んで関わり始めましたが、スタート時点から伴走してあげればよかった、受験勉強を開始するのならやはり新5年生からが楽だっただろうな、という反省点があります。そして、受験のために日本に戻っていた直前期はかなり厳しいことも言ってしまって、ホテルの部屋で親子ともに煮詰まってしまうことも多々ありました。そんなときはパッと離れて、塾で先生にしっかり聞いておいでと、enaに頼りました。

#### ・志望校合格の瞬間のお気持ち

海外生特別選抜、グローバル専願試験の2回連続で不合格の後、最後のチャンスとして受けた帰国生試験でした。その合格発表を待つ頃は、「これが合格でも不合格でも、可能な限り努力した、これでダメなら次のチャンスだ。前に進もう」と親子ともに心底思っていました。結果合格がもらえて、子供の努力が報われて本当によかったと思うとともに、「やれることを全てやる、納得できるまで徹底的にやりきる」ことの大切さも改めて実感した瞬間となりました。

# 開智日本橋、かえつ有明、頌栄女子学院合格

## ・中学受験を決めたきっかけ

小2の冬に2年間の予定で渡米しましたが、その前から、「中学受験は当然するもの」というスタンスでいました。地域柄、公立の中学校に通わせることに学力面でも風紀面でも不安があったためです。また、中高一貫校にいれば思春期の色々やりたいことが増える時期に、高校受験に時間を割かなくてよい、というメリットも大きいと思いました。アメリカで身につけた英語力を何としてでも維持し、さらに伸ばせる環境が整っている学校に進学してほしい、というのが最終的に受験を決めたきっかけです。

## ・現地での学習で苦労したこと、うまくいったこと

新しい環境が大好きで、物怖じしない性格の娘は、アルファベットで自分の名前しか書けない状態で現地校に行ったにもかかわらず、すぐに環境に馴染み、楽しんで学校生活を送りました。現地では日本人家族ばかりで集まるようなイベントも多かったのですが、我が家の方針として、「できるだけ現地の方たちの中で子どもたちを過ごさせること」を大事にし、放課後も休日も、ひっきりなしに友達が家に入出入りし、近所や学校のお友達とのプレイデートの連続でした。その甲斐もあり、英語は友達や現地の方々との交流を通して自然と身につく、特に大きな苦労をせずに英語を習得できたように思います。

日本語での学習は土曜日の日本語補習校の宿題、日本から取り寄せていた通信教育（国・算）を行っていました。帰国後に受験をするとは決めていたものの、補習校での宿題と通信教育の課題をこなすことで精一杯になり、日本の中学受験生が行っているような勉強は何一つしていませんでした。なかなか勉強へのスイッチが入らない子でしたので、夜は娘に付きっきりで、泣きながら課題をこなしていました。

うまくいったことは読書の習慣です。元々、図書館司書になりたいと言うほど本が好きな子でしたので、日本から持っていった荷物の半分が本というほど、日本語の本にも不自由しないように配慮しました。英語の本が少しずつ読めるようになってきた頃からは現地の図書館に足繁く通い、お気に入りの本が常に家にあるような状態を作り出していたこともよかったです。最近では eBook や Audio Book も普及してきており、現地で作った図書館のアカウントは帰国してからも利用可能だったので、帰国してからも電子書籍で英語での読書をするのができ、帰国後の英語の力の維持に大変役に立ったと思っています。

## ・帰国後の学習で苦労したこと、うまくいったこと

アメリカで過ごしたのは2年2カ月でしたが、とにかくよく遊び、博物館などの施設にも足を運び、現地でのイベント等も存分に楽しむことができました。本人にとってはこれまでで最も楽しい期間だったと思います。小5の3月末に帰国し、4月から ena にお世話になり始めましたが、遊びほうけていた米国生活から、既に5年生となって受験モードに入り始めた生活に切り替えられず、苦労しました。ちょうど一回目の COVID19 による緊急事態宣言が発令された頃でしたので、ena の授業もオンラインとなっており、授業中にパソコン上で動画サイトをこっそり観ていたことも…。帰国して ena での学習がスタートした頃は親子バトルが絶えない時期でした。

## ・学校選びのポイント

渡米前に、可能な範囲で学校説明会や文化祭にも親子で参加していたことは、中学受験をするのだという本人のイメージをつけるためにはよかったです。しかし、実際にどの学校を受けるかは、帰国してから徐々に考え始めました。試験科目、通学経路、学校の立地を元に、学校のホームページを見ながら、娘が受験できそうな学校を抽出していきました。その中から、コロナ禍で小5のうちから学校説明会・見学会に参加できる学校が限られていたので、ホームページでの学校紹介動画を観ながら、自分の行きたい学校像を絞り込ん

でいきました。実際に、日本に帰国して、日本の学校に改めて通ってみると、娘から「アメリカの学校のこういうところがよかった」といった意見が出てきて、自ずとどのような中学に行きたいかということも見えてきた気がします。

ですが、ホームページ等で情報収集し、娘が興味を持った学校であったとしても、いざ説明会に参加してみると、なぜかしっかりこないという学校も中には複数あり、実際に足を運び、学校の中の様子や在校生、先生と話をすること、体験授業を受けることの大切さを実感しました。有難いことに複数の学校から合格をいただき、学校を選べる状況になりましたが、最終的には娘の希望でどの学校に進学するかを決めました。学校の進学実績、偏差値、校風等、親としても思うところは多少ありましたが、6年間通学するのは娘自身ですので、自分が自信をもって「この学校で学びたい」と選んだ学校に送り出したいと思い、親としてはとにかく情報提供に徹しました。

#### ・これから受験する生徒さんの保護者様へのアドバイス

小5の4月からの受験生活でしたが、帰国直後の学校への不応、友人関係でのトラブル、塾の勉強をめぐる親子での衝突など、挙げたらきりがなほど様々な出来事が起こり、親としての器と力量をこれでもかと試されるような日々でした。娘の性格上、コツコツ努力する、諦めずに問題に向かう、できるようになるまで繰り返す、といったことが苦手で、どうしても勉強が予定通り進まず、授業にも集中できていない様子が頻繁にみられました。いくら強く言っても、できるようにならず、スケジュールのリマインド、宿題の締め切りの管理、など結局全て親が管理するしかありませんでした。一向にできるようにならない娘を見ていて、6年生の夏が終わった頃に、やっと、それを本人の発達の課題として、集中力、計画性、緻密さ、粘り強さといった部分への苦手さがあるのではないかと思ひ至りました。勇気を出して娘と話し合いをし、生まれつきの苦手さがあると思ひ部分に関しては過度な要求をせず、どんなやり方であったとしても、本人なりの方法で学習しようとしているならそれでいい、親としてできることは全てやると本人に伝えました。本人も気持ち的に楽になったのか、その後は反発も減り、親子で会話する機会も増え、結果的には受験直前期を穏やかに過ごすことに繋がったと思ひます。同じ事を繰り返すのが苦手な娘は、その反面、新しい環境に行くことが好きで、物怖じしない性格でしたので、入試本番では緊張することなく、むしろ面接などは楽しんでいる様子でしたので、それがいい結果に結びついたので思ひます。

お子さんの性格、特性は本当に様々です。我が家ではそれに気づくまでに長い年月がかかってしまいましたが、受験を通して本人の特性を知り、得意・不得意を改めて実感することができたことは、この先の娘の人生にとっても、親子関係にとっても、必ずよい影響を与えてくれるものと信じています。終わりの見えない長いトンネルの中でただ停滞しているだけのように感じた時期もありましたが、子どもの力を信じて、受験の先にあるお子さんの可能性を楽しみに、乗り越えていただけたらと思ひます。

#### ・志望校合格の瞬間の気持ち

素直に「よかった！」と喜ぶと同時に、これまで親子で頑張ってきたことが報われたと思ひ瞬間でした。個性的な部分がある我が子ですが、それでも、その個性を認めていただき、入学を許可していただけたことに感謝の気持ちを覚えました。

# 広尾学園、広尾小石川、三田国際、かえつ有明合格

日本生まれ、日本育ちの娘はインターナショナルスクールで小学校を過ごしました。漠然と受験をするのかなと思ったまま5年生になり、2020年3月以降コロナ禍で学校がオンラインとなり、在宅の時間も増えたので受験勉強を始めてみようと、今思えばやや軽い気持ちでした。

enaでオンラインの体験授業を受けてみた際、英語、国語は問題なかったのですが、算数の授業には全くついて行けず泣きながら部屋から出てきました。母としてはその時に現実を見た思いで、目の前が暗くなったのを覚えています（笑）。

英語さえできればなんとかなるというのは都市伝説ですね。分かってはいたけれど、アメリカの算数は正直使い物にならない。インターでは優秀な子でも、日本の中学受験の世界では落ちこぼれ。そんな言葉は娘には一切言うてはならないけれど、11歳にもなれば、体験授業の短時間でそんなの自分の肌で感じてしまいました。

これはまずい、なんとかせねば！学力もだけれど、本人の自信も取り戻さなくてはならない。と、国語算数に関しては個別指導塾に託しました。そこで一通りの算数を網羅してもらい、enaでは英語総合とエッセイを受講。

6年生になった頃には広尾対策クラス（英語、算数、国語）に変更しました。その頃には算数もついて行けるようになりました。ena国際部の授業はどのクラスも捨て難く、どれも必要になる気がして、受けさせていない授業があるとそれが不安になりました。日本語面接、作文、英語面接、英文法……。ああ、これが受けられていない、この対策ができていないのではないかと眉間の皺が深くなる日々でした。

でも、親が不安になってはいけません。少なくとも、それを見せてはならない。

娘がどれだけ睡眠を取れているか、学校と塾の宿題の量、集中の度合い、食べているもの、ストレス発散、それらをチェックして、無駄のないようにタイムマネジメントをサポートする。全ての授業を網羅することはできない。でも根本に返って、本当に必要なかを考える。優先順位を絞っていく。

戦うのは子ども自身ですが、伴走することはいくらでもできます。

そもそも、なぜ中学受験をするのか。受験自体が人生の目標になってはいないか。はたまた、親の目標になってはいないか。ゴールは、彼女が人生を謳歌すること。どんな仕事に就きたいのか、その仕事のためにはどんな大学に行ったらいいか、その大学に行くにはどんな中学高校に行くのが有利なのか。

私たち夫婦は、娘が人生を楽しむための可能性を広げたい。かと言って、そのために、「今」を殺しては本末転倒。今が踏ん張り時だけど、頑張ることは、全てを犠牲にすることではない。

だから、入試直前に秋の学校の有志キャンプも行きました。個別指導塾の先生にはお叱りを受けましたよ。「受験は、詰め込みなんです。時間は有限なんです。」そりゃそうです。合格させるのが仕事の塾の先生はそう言います。でも、それ以降の人生のこと考えたら、6年生最後のキャンプは、娘にとって大切な時間だったんです。

最初の入試は、高倍率で有名な広尾小石川。「練習だと思って。大丈夫だよ。2回でも3回でも受けられるんだから。とにかく慣れておいで。Enjoy!」

校門で、永田先生を発見したときは、ああ、始まった、という思いと共に、応援していただいているという心強さがありました。

結果は、不合格でした。予想はしていたけれど、ショックでした。ショックというより、模試よりも明確に「レベルに届いていない」と見せつけられた気がして、娘が不安定になるのではないかと、そっちの不安が大きかったです。でも、伴走者としては、そんな不安を見せてはいけません。「大丈夫だよ。あなたを欲しいと思う学校があれば、そこに行けば良いんだから。」と励ましました。

次の試験は開地日本橋。こちらは合格を頂きましたが、判定が出る瞬間まで私自身が脂汗が滲んでいたのを覚えています。合格の文字を見たときの娘の涙。ようやく、娘の自信が戻ってきた瞬間だったんだと思います。

そこからは快進撃です。結果的に2度目の挑戦で広尾小石川も合格をいただき、三田国際、かえつ有明、広尾学園も合格。最終的には広尾学園に行くことにいたしました。

今思えば、最初の日程で不合格だったのは、かえって気持ちが引き締まったとも言えるかもしれません。また、受験全般に関して、慣れは絶対に必要です。模試とも違った緊張感があります。その意味でも、負担になりすぎない程度で、早い日程の学校を受けてみると良いと思いました。

一つ合格が出ると、そこからリラックスして、面接でも笑顔でいられたり、冷静に考えることができたようです。また、回を重ねるごとに、彼女の振り返りが冷静になっていったのを感じました。2度目の広尾小石川が合格したのは、質問形式に慣れて、時間配分がうまく行ったのもあると思います。

国際生入試は、中学受験の中でも特殊です。明確な偏差値では測り切れない部分があります。英語さえできればなんとかなる、は都市伝説かもしれませんが、やっぱり英語の力が一番重視されているというのは感じました。

国語算数で合格することはないけれど、国語算数で落とされることがある、というのは言い得て妙だなと思います。帰国生、インター生ではやはり算数は差がついてしまう分野です。入試での点数配分も重要ですが、何より中学入学後に困らないように、日本の算数は早めにスタートしておく、涙が少なく済むかもしれないなと思います。

最後に、インターに通っている方、海外生活をされている方には、受験勉強も大事ですが、「今」を大事にして欲しいと思います。国際生を受け入れている中学は、国際的な感覚を持った生徒を欲しているんです。学

校側を国際的にするために必要な要員が国際生なんです。すなわち、インターの生活、海外の生活を満喫した生徒の方が、学校側としては本来欲しい国際生の生徒像なのではないかなあとと思います。だからこそ、子どもには「今」しか体験できないことを満喫させて欲しいなと思います。

我が家はまた3年後、次女が受験に挑みます。今回の笑いも涙も、全て次に活かせる経験となりました。